小品（シャオピン）における不満

外国語学部　中国語学科3年　佐藤麻鈴

はじめに

あなたは小品（シャオピン）を知っていますか？神奈川大学では文化ウィークという、外国語学部（英語英文学科、スペイン語学科、中国語学科、国際文化交流学科）の学生が主体となって、企画・運営を行うイベントがあります。小品（シャオピン）とは、そのイベントの1つであり、中国語学科の3年生が今まで学んだ中国語を生かし、中国語で演劇をするというものです。各ゼミで対抗することとなり、今年は10月19日（土）に開催されました。教授たちからは「今までの小品に比べてどのゼミも一番完成度が高い」と評価されるほど白熱したイベントとなりました。

今年、私自身が小品を行って思ったことは、小品は2年生で行う方が良いのでは？　ということです。これからその理由を2つ述べます。

1　2年生にはゆとりがある

2年生は3年生に比べて時間があり、精神的にも余裕があります。２０１６年卒から就職活動が3月からになりますが、実際は10月くらいに自己ＰＲや履歴書の書き方を学んだり、自己分析などをする必要があると思われます。ですので、このまま3年生に小品を行わせても、1人ひとりに演劇を練習する時間を持つことができるのか不安であります。今年を例に出すと、10月は本大学で行われる就職講座と被っていてどの学生も精神的にフラフラでした。就職講座は基本的に18時から19時半までのものが多く、通学に時間がかかる学生が家に着く頃には21時以降なんてことがザラにあります。翌日に1限から講義がある時は体を休めることすらままならないはずです。それに、例え家が近くとも、人生の一大イベントが控えた状態のストレスは今まで感じたことのない程のものですし、演劇ができるような気持ちの余裕はないと思われます。このようなストレスを抱えた状態のままでは、練習を行うことは容易ではなくなり、小品は全体的に完成度の低いグダグダとしたおゆうぎ会になってしまうでしょう。今回の小品は今までで一番良い出来だったという評価も、あくまで〝今までと比べて〟なのだと思います。緊張ではなく明らかに練習不足によるセリフのド忘れや、声が小さくて何を言っているか聞こえない、字幕の作成忘れなど、上演中にはいくつかの問題が起こっていました。これらは確認不足などもありますが、やはり3年生に練習時間が確保できない、ストレスのせいで練習に熱が入らないことが影響しているのではないかと思います。

2　勉強に対する姿勢が変わる

2年生には「中国語の勉強の仕方が分からない」「積極的に人と話せないから中国語会話が身に付かない」「中国人の友達が欲しい」と悩んでいる学生が少なからずいると思います。しかし、小品を

行うことでその悩みを払拭することができます。

例えば、小品で使う台本は各ゼミの学生たちが用意します（一部のゼミに例外あり）。その台本を制作する時には、まず話の流れやセリフを日本語で考え、その後中国語に訳していかなければなりません。しかし講義で学んだ中国語は、実際の中国人があまり使わない言い回しも多く含まれているため、訳した文章は中国人留学生の方々に見てもらい加筆、修正をすることが大切です。最初に挙げた悩みを抱えている学生は、この時に中国人留学生と接し、友達になってしまうのが良いです。ChineseExpressは少し緊張する、怖いなどといった印象を持つ学生も、こういう機会を有効活用し留学生と交流するべきだと思います。留学生の方々は優しい人が多く、丁寧に中国語を教えてくれます。日本語も喋れるので意思疎通ができるか心配という学生も問題はないと思います。台本制作、または留学生との交流の結果、教科書に載ることが少ない中国人らしい中国語を知り、学ぶことができるようになります。これ以外にも、劇を行うためにはセリフを暗唱する必要があり、教科書の例文を暗記するより何倍も学習の役に立つでしょう。

最後に

今までの小品は3年生が今まで学んできた中国語を見せる良い機会として行っていたのでしょうが、実際の3年生の中国語のレベルは一部を除いて決して高いものではありません。自分の中国語のレベルがどの程度のものなのか、今までの自分の学習態度を見つめ直す機会としても、2年生に小品をさせた方が、今後の中国語学科全体のレベルの向上に繋がると私は思います。また、2年生に小品をさせる際に、1年生に演劇を見せるようにしたら、1年生は中国語学習に対する意欲を高めるきっかけになるのではないでしょうか。さらに、今まで小品は16号館視聴覚Bで行われていましたが、同じ16号館でもセレストホールを借りて行えば、小品がより活気溢れる素晴らしい中国語学科の恒例行事になりえると思います。